

日本におけるコリア系民俗宗教¹の変化の様相 —ある中国朝鮮族女性の留学生活と「霊的な実践」の関係を中心に—

玄 善 允

1. はじめに
2. ある中国朝鮮族留学生のライフヒストリー
3. 留学までの中国生活についての検討
4. 留学以降
5. 自立と今後の展望
6. まとめにかえて—本稿の意義と限界

キーワード：中国朝鮮族、コリア系民俗宗教、
留学生活

1. はじめに

大阪を中心に盛行していた在日のコリア系民俗宗教の変貌が取りざたされて久しい（飯田 2002, 宗教社会学の会 2012, 玄 2013）。最も分かりやすいのは場の变化である。生駒山麓など山間に多くあった「朝鮮寺」の衰亡、大阪におけるコリア系民俗宗教のメッカと評されていた「龍王宮」が撤去された一方で、在日集住地区のみならず、在日が主流をなさない地域においてもコリア系民俗宗教施設が増加している。

以上の場の变化に加えて、祭儀を司る祭司の出自の変化がある。20世紀後半までの主力であった在日一世の祭司（ムーダン、シムバ

ン、スニム、ボサルなど）は死亡、高齢化などでしだいに姿を消し、その穴を埋めるかのように、韓国（特に済州島）からの出稼ぎ祭司が主流となるばかりか、日本人の祭司までいる（宮下 2005, 金 2009, 山口 2012）。しかも、在日であっても二世はその親世代の民俗宗教的信仰や実践に対して距離をおくばかりか嫌悪する傾向が強かったのに対し、その後続世代である三世、四世の中には、そうした信仰、そして実践に意味を見出すばかりか、自ら修行して祭司になったりする例までであるという（金 2014）。

さらには、クライアントの変化もある。オールドカマーの在日一世の割合が減り、ニューカマーの韓国系女性たち、さらには、日本人女性、それも若くて一定の教育歴を備えた女性たちが珍しくなくなっているという²。

このように、日本におけるコリア系民俗宗教は、祭司とクライアントの双方において、その中核が非識字の在日一世の中高年の女性だった従来とは、出自と世代と教育歴など点において、大きな変化が生じているわけである。

¹ 筆者はこれまでに発表した関連論考においては、本稿で扱っているような現象に対して「在日における巫俗」といった用語を用いてきたが、本稿ではそれを「コリア系民俗宗教」という用語に置き換えた。本稿で紹介する事例の宗教的実践の曖昧性に加えて当事者の意識において巫俗という用語に対する違和感があることを考慮して、ひとまずは本稿に限ってという限定つきで使用することにした。但し、以上の便宜性に加えて、本稿で垣間見えた東アジア、ひいては世界においてひ

そかに進行していそうな同種の現象を指す用語としては、その方が適切になりそうな展望もないわけではない。

² 朝鮮寺の調査を継続中の吉田全宏氏（大阪市立大学）のご厚意で、その調査データを見せて頂いた。その吉田氏が近いうちに、それらデータに基づいた本格的な論文を公表されるはずなので、詳細はそれに委ねる。記して吉田氏に感謝する

以上は外見でそれと分かる変化なのだが、それは内実の変化とも連動しているに違いない。長くなるが、少々立ち入って整理しておく。

かつて朝鮮半島では男系の祖先崇拜を中核にして封建王政を支えた儒教、ついでは民族的伝統を破壊、抹殺しようとした日本の植民地政策、さらには解放後の近代主義的、権威主義的専制など、その時々統治イデオロギーによって民俗宗教（特に巫俗）を抑圧、弾圧してきた。それでも、そうした男たちの表の「統治イデオロギー」に対して、主に女たちによって、いわば裏の「魂、霊の交感の場」として根強く維持されてきた。特に済州などの地方の村落においては、共同体の伝統と村民の精神的絆の維持、再生産の場の機能を果たしてきた。

在日の民俗宗教も当然の如く、その性格を受け継ぐのだが、そこにさらに、越境という条件が加わった。植民地下朝鮮の地方農村からいきなり日本の主に大都市に移動するという環境の急激な変化、とりわけその多くが非識字であった女性たちの場合は、甚だしい言語的ハンディキャップと文化的差異、さらには家父長的な伝統文化がもたらす家庭内での苦難、劣悪な経済環境が強いる厳しい労働など幾重にも厳しい条件下で、故郷の村落共同体の伝統と精神的絆、それと連動した信仰共同体としての民俗宗教実践に、精神的安定と生活存続の拠点を見出していたのである。

つまり、在日における民俗宗教実践とは、異郷における主として非識字女性たちの祈りの時空であると同時に、同じ出自、同じ境遇、同じ文化、経済的資源を有するものたち（或いはそれしか持たない者たち）の共同性の場所、つまり、頼母子などの経済的相互扶助や、夜間中学情報、子弟の結婚相手の紹介、その他、生活と慰安と祈りといった多重的意味を備えた場所なのであった（玄 2011, 2013）。

ところが今や、そうした歴史的由来や伝統と

はあたかも無縁に思える多様な出自、生活環境、教育的バックボーンを持った人々が、いわば個別にそうした祈りに参入している。要するに、一方では外延の多様化（多様な出自、多様なステイタス）があり、そして他方では、民族、伝統、共通の経験と記憶といった共同体性は影を潜め、個別化の道を歩んでいると、ひとまずは言えるだろう。

そうした変貌、その突出した事例に、筆者は遭遇した。民俗宗教などとは縁がなさそうに思われがちな社会主義体制下の中国で生まれ育った朝鮮族女性が、日本に留学に来て以来、心身の不調を契機として街角の占いとお祓いに救いを求め、指導されるままに民俗宗教的实践を繰り返しているうちに、自らが職能的な訓練を受けるようになり、ついには、コリア系民俗宗教の色合いが濃厚な「占いと助言」によってクライアントを精神的にサポートすることを半ば職業ひいては使命と考えるに至った事例である。

そこで、次章で彼女の生活史を紹介したうえで、それに続く3章～6章ではそのライフヒストリーに関して、次のような事項に絞って検討する。

1. 中国朝鮮族女性の日本でのコリア系民俗宗教との遭遇、そしてその職能者としての自覚に至る過程を、日本におけるコリア系民俗宗教の変貌の際立った事例として提示して、その意味を問う。それはいまだ希少例にすぎず、代表性を主張できそうにはない事例であるが、その希少性という限界を忘れない限り、それなりの意味を持つに違いないし、祭司の出自の多様化は云々されてきたが、中国朝鮮族の参入の事例報告はこれまでになかった。
2. 以上の事例の特殊性に鑑みて、中国朝鮮族における伝統的習俗や中国の社会変動などが一人の女性に及ぼした影響と、その後の彼女の民俗宗教との関係などにつ

いて考える。

3. 日本での留学生活におけるコリア系民俗宗教との出会いから積極的な実践へと至る過程、それと彼女の学問研究や社会活動との関係、さらには生活戦略としての民俗宗教的職能について考える。
4. 以上を総合して、日本の植民地期に朝鮮半島から北へ（主に中国東北地域）、そして南へ（主に日本へ）移動した人びとが、朝鮮半島出自の伝統的習俗の一部を介して、日本で再接触（再結合）するに至ったことが持つ意味について考える。

さて、序章の締めくくりとして、以下で紹介するライフヒストリーの作成過程などに関して説明しておきたい。

筆者と当事者（以下ではAさんと仮名で呼ぶ）の共通の知人（済州島出身の方）から、Aさんが「シムバン（巫堂に対する済州の呼称）の仕事をしている」という話を聞きつけ、中国朝鮮族研究と在日の民俗宗教研究といった両側面からおおいに興味をそそられ、本人にインタビューを申し出たところ快諾を頂いた。それ以前に研究会などで何度もお会いしていたことが、そうしたスムーズな展開の下敷きになったものと思われる。都合5回にわたってインタビューを行い、その度に前回の聞き書きメモを提示したうえで、改めて生じた疑問点について質問を繰り返すほか、手記も提供していただき、さらにはメールで質疑応答を繰り返すなどして、補充・修正した最終稿についても確認していた。（注3）

以上のように、以下のライフヒストリーは、当事者であるAさんの全面的な協力の下に作成に至ったものであり、公表する許可も得た。但

し、紙幅の都合上、実際の証言内容の細部に關しては大幅に削除を余儀なくされた。特に中国の小中学、師範学校での教育内容、中国の小中学校で教員として教えていた内容、日本の大学、大学院での研究内容、その間に読んだ本などについての詳細な証言は、当事者の知的環境、思想的傾向などを知るうえで貴重なものだったが、紙幅の問題ばかりかプライバシーに抵触する懸念もあって、割愛せざるをなかった。また、証言に現れた諸個人についてもプライバシーに抵触する懸念がある場合は削除した。また、ライフヒストリーを含めた本稿全体についても、Aさんに提示して意見を交わした。以上のように本稿はある意味でAさんと筆者の共同作業のような側面もあるが、執筆主体は筆者に他ならず、本稿の責任はすべて筆者にあることに変わりはない。

2. ある中国朝鮮族女性留学生のライフヒストリー

以下のライフヒストリーの紹介にあたっては、二つの時系列を採用した。本稿の主要な目的がコリア系民俗宗教に関係しているという事情もあって、一般的なライフヒストリー、そして民俗宗教関連のライフヒストリーとを別立てにして、それぞれを時系列で紹介する。その結果、まずは民俗宗教関係を除いたライフヒストリーとして、2.1.1：Aさんの中国での生い立ちなど、2.1.2：留学の決意、実行と留学生活の初期に至るまで。次いで、民俗宗教との関係に焦点をあてたライフヒストリーとして、2.2.1：中国時代の経験など、2.2.2：日本での留学生活におけるそれとの遭遇などについて、さらには、以上の二つの時系列が交わった現時点における活動、心境、今後の展望などとして、2.3.1：民

³ インタビューやメールでのやり取りは、2014年5月3日を起点に、2015年1月6日まで頻繁に行った。

俗宗教の職能者としての自立、2.3.2：これまでの生活のとりあえずの総括、2.3.3：今後の人生設計、といった項目で順々に叙述する。尚、中国事情に疎い日本の読者の理解に役立てるために、必要最小限の関連情報を【筆者補足】の形で付している。

2.1.1 中国での生き立ちなど

1975年中国撫順で生まれた。祖父がおそらく朝鮮北部から中国に移住したのだろう。その祖父は父が10代の頃に亡くなったらしい。父、母、姉、弟、そして自分の5人家族だった。改革開放以前には村に人民公社があり、漢族大隊と朝鮮族大隊があった。【筆者補足：生産隊を基礎とする公社、大隊、生産隊という三級管理体制で、1958年には、一郷一人民公社とし、全国に26万人民公社があった。その規模は、公社が約2千戸、生産大隊が約300～500戸、生産隊が約20～30戸であった】我が家はそのうちの朝鮮族第2小隊（生産隊）に所属し、その小隊に漢族が1～2家族いた。改革開放以後には、父は街道での運転手、母は鳥の飼育や大蒜ニラの栽培など農業を始め、さらにその後、両親は石炭・石油の運送、ガス供給などの自営業を始めた。それ以降、その仕事に関係する漢族の人がよく家を訪れた。家の近所にアイスクリームを作る大きな会社があり、その近所に住んでいた漢族の人たち喧嘩したり遊んだりすることもあったが、たいていの遊び相手は朝鮮族の子どもだった。

撫順で朝鮮族の中学校（1クラスが30名～40名、1学年に3クラスで、3年制）を卒業後、瀋陽にあった遼寧朝鮮族師範学校〔4年制〕へ進学した。教授言語は朝鮮語、土日は帰宅できるが、それ以外は一律に寮生活だった。

実は、大学に進むために普通の高校に行きなかったのだが、卒業後は先生にならずに父の事業を手伝えばいいからと、当時は事業で成功していた父に説得されて、師範学校に進学したの

だった。学費無料で生活費も支給され、実質的には既に公務員扱いだった。

1995年に卒業したが、後述するように父の事業は既になくなっており、約束は反故になってしまった。しかし、小学校の先生になるのはどうしても嫌で、北京に逃げた。北京には、父の腹違いの兄（つまり私からすれば伯父）の息子（私からすれば従兄）二人が住んでおり、二番目の兄の家に2ヶ月ほど滞在し、英語教室に通った。食事は兄嫁（漢族）が作ってくれたので、お金はあまり必要でなく、兄の友人たちの漢族の人たちと一緒によく遊んだ。

しかし、父の再三の懇請に負けて、2か月後には瀋陽に戻って小学校に就職した。先ずは図書館に配属され、次いで副科目の社会、歴史、地理、算数などを教えた。

父はガス供給業や、その後始めた化学工場の経営によって、91年ごろには当時では珍しく日産の自動車を持つほど裕福だった。ところが、1994年になると、父が「承包」していた化学工場を、生産大隊が父の意向を無視して、韓国人資本に貸し出した。その結果、父はその工場を失い、失業してしまった。【筆者補足：中国では1978年に計画経済から市場経済へと政策を転換した。その結果、農村では80年代に土地を集団的所有・利用から、利用は世帯に請け負わせる「土地承包法」という制度に変更され、その延長線上で集団所有の企業なども個人に請け負わせる「承包」を実施した。さらに90年代にはこれらの集団財の市場経済に基づく対外開放も可能になった】

2.1.2 留学の決意、実行と留学生活

姉が師範学校卒業時に、その師範学校の推薦で音大に進み、そこを卒業後には日本に留学した。母が自分は様々な事情から勉強できなかったの、子どもには何としても勉強させようと懸命で、勝手に手続して姉を日本に（96年11月）留学させたのである。

そして、それをきっかけに村では留学熱が沸騰して、次々に後を追う人が出てきた。母は姉の留学費用を借金でねん出したが、後に姉がそれをすべて返済した。総額は55000元だった。因みに、私が師範学校の学生時代に支給されていた生活費は月額50円で、たとえ学生としての奨学金的なものにすぎなかったとはいえ、ともかく、それと比べれば、留学に要する費用がどれだけ巨額だったかが分かるはずである。

私は瀋陽で小学校に勤務しながら、冬や夏の休暇には延辺大学の講習を受ける一方で、大いに遊んだりもしていた。ところが、ある日、脳性マヒの子供が他の人に助けられながら懸命にトイレに行くのを見て、自分の自堕落さを思い知り、頑張ろうと思って日本への留学を決意した。

両親と姉は反対したが、私の決心は固かった。そこで、日本にいた姉が語学学校を探すなど、手続きの一切をしてくれた。当面の経費としては、半年の学費30万円と入学金8万円、それとは別に約8万円を持参して98年に来日した。そのお金はすべて姉が送ってくれた。

1998年から2年間、大阪の日本語学校で日本語を学び、さらに別の外国語学校で1年間、応用日本語、つまり翻訳家になるための勉強をした。次いで、短大の国文科で学んだ。学友には韓国からの留学生が多かった。さらには別の女子大の国際文化学科の3年生に編入し、学部卒業後も1年の研究生、2年の修士課程を終えた。指導教員は文化人類学専門だったので、フィールドワークの方法論とスチュアート・ホルの理論的枠組みを用いて、日本における朝鮮族に関する修士論文を書いた。その後、別の大学の社会学科の博士課程に進んだ。

博士課程では、社会思想史を専門とする指導教授の下で、世界の現代思想の本を沢山読んだ。それとは別個に、映画について語る勉強会で、元及び現役の教師たちと学校教育に関する

本を読み議論するなどの活動を1年半も続けている。またそれと並行して、別の大学の文化人類学の教授と、朝鮮の植民地時代の教育やアイデンティティに関する書物の勉強会もしている。

そうした勉強の他に、在日のNPO団体で韓国と在日社会を結ぶ活動に継続的に関わっている。また、朝鮮族のコミュニティを作るためにさまざまなイベントを企画、実践したが、人間関係の軋轢などもあって、ついには断念してしまった。

2.2 コリア系民俗宗教との関係

2.2.1 両親と私自身の中国での民俗宗教の経験

中国では儒教や巫俗の祭儀などの経験はあまりなかったが、ムーダン（巫堂、コリア系民俗宗教のシャーマン）のアドバイスを受けて、お正月に幾度か、両親がそれらしき儀式をしていた記憶がある。また、父方の祖父の墓の地域が果樹園になり、墓自体がなくなってしまっていることを占いで指摘された際にも、両親は「ムーダン」に依頼して「クッ」のようなことをした。豚の頭肉に刀を刺して、そこに次々とお札を入れると、突然、その「刀が立つ」現象を目撃したことがある。

母はその種のことが好きだった。また1994年に事業を奪われて無職になった父は、全国的に大流行していた気功に専念するようになった。そして、西安で1か月にわたって気功の訓練を受けた。その際に一週間にわたって断食し座禅を組んでいた父はある時、大きな蛇が体に巻きつく夢を見た。その話を聞いた私は、その蛇こそは神であると思ったし、今でもそう信じている。そうした霊的なものが、父の場合は気功の訓練によって目覚めたのだろう。父は今は韓国に在住しており、無料で気功に基づく治療をしてあげているらしい。

実は、私自身も幼い頃から占いが好きで、将来が不安になったりした時に、道端の占い師に1回10元くらいで、将来についての占いをし

もらったりしていた。自分は両親の傾向を受け継いでいるのだろう。近年、母親の夢に祖先が現れたり、よくないことが起こったとき、母は私と相談して、母が現在住んでいる大連の家で、自分でお祓いの儀式を行っている。

2.2.2 日本でのコリア系民俗宗教との遭遇とイニシエーション

私は日本に来て病気で苦しんでいた2004年頃、当時住んでいた在日集住地域の街角で「東洋哲学」の看板を見かけ、占いをしてもらった。それが「師匠（ししょう）」【筆者補足：Aさんはその人のことを時には「スニム（僧侶）」とも呼ぶこともあるが、この「師匠」の方がはるかに頻度が高い】との出会いである。その後、「師匠」から「クッ」（巫俗祭儀、いわばお祓いの儀式）を勧められて、当時の自分としては大金の14万円も支払い、箕面の山中までお供えなどを持参してその儀式をしてもらった。また、蚤（30万円）など高タンパク食品を、また胃潰瘍を患った際には、蛇のスープ（50万円）を勧められて、ことごとくその通りにした。そのおかげなのか、3年前の病院での検査では、胃潰瘍の跡が4カ所ほど映っていたが完治していた。

その後、師匠から東洋哲学（四柱推命）を習いながら、助手として働き、生活費、学費などを受け取った。月7万円の奨学金ももらった。2004年から2007年までのことである。占い（四柱推命）の基本は本に書いてあるが、その他は、師匠から口伝で3年～4年にわたる訓練が必要だった。そしてやがて、私自身が占いを始めた。

やがて在日二世の篤志家が在日集住地域の古い民家を「寺」に改装することになり、私は2012年から、信者がいないどころか誰にも開放していないその「寺」の管理人としてその1階に暮らし、2階は仏像などで埋め尽くされた本堂となっており、[氣]が充満している。

その一方で、ネットその他で占いその他の相談にのっている。例えば、韓国在住のある韓国

人には2005年以来、ことあるごとに依頼されて身の上相談、占いなどをしてあげている。恋人との別れ、就職、転職、結婚、転職などの相談や占いであり、その人は自分の妻にも、私のような相談相手がいることを打ち明けていないらしい。

師匠は元来、韓国で独自にお寺を運営していたが、病気で倒れた。そして病の床で、「東に行け」という神のお告げを聞き、それにしたがって2002年に来日した。その後、日本橋のマンション、西成、そして今里などで、韓国からやってきたニューカマーの水商売の女性たち、中国朝鮮族の靴製造業者などを相手に占いやクッをしていた。その人たちはオーバーステイなど法的、私的な問題を多く抱え、とりわけ、外国人登録証や健康保険証がないので、病院などには行けない。そうした人びとに、師匠はマイシンなどの薬を無料で分けてあげたりして信頼を得て、占いそしてその延長でのクッも行っていた。クッは箕面の山中、貝塚の二色浜などで行い、自分はその助手（通訳なども含む）をするようになった。師匠はそれらの仕事ですごくお金を儲けていた。

生野区の在日集住地域の街中でいきなり呼びかけられて、「シンパドラ（神を受け取れ）」などと声をかけられることもある。自分の「素質」が「その種の人たち」には分かるらしい。自分には神は見えないし、感じないけれども、半分以上ははその「種族」なのかもしれない。私の中に潜んでいた資質を、師匠が目覚めさせてくれたのだろう。私にそうした声をかける人達は、生粋の韓国人、あるいは結婚移住によって韓国籍を取得した後に日本に出嫁ぎに来た中国朝鮮族の人たちである。占いやクッを生業にしている、3か月の観光ビザで日本への往来を繰り返している。師匠は資質の浪費だと考えて、その種の人々と私が関わりになるのを嫌がった。

2.3 日本生活の中間総括と自立の模索、そして今後の展望

2.3.1 民俗宗教者としての自立

先にも述べたが、師匠はクツをしていたが、私自身はしたことがないし、する気もない。それはお金稼ぎの為のものにすぎず、効果がないとも思っている。そのうえ、クツをするには特別な訓練が必要なのだが、私は「ムーダン」になるつもりなどないので、その必要もない。その代わりに、直接の面談や電話やメールで、クライアントが困難を乗り越えるように励ましている。また、韓国に行ったままで私が関係を断ってしまった師匠が、大阪を発つに際して大量に残してくれたお札（お守り）を渡して、家のどこかに置くように指示して、クライアントの精神的安定を図っている。

ところで、占いの世界に入ると、対人関係、社会関係における障害が生じる。人の顔を見ると、性格、生活習慣、悩み、病気などが見えてくる。そして、自分の為より、その人のために何かをしてあげたいと思うようになる。関心が社会から遠ざかり、具体的な個人に向かってしまう。そんな自分の言動が周囲の人々の理解を得られなくなりがちになる。そうした一般の人々との距離のせいで、孤独感に苦しむようになる。苦しんでいる人のサポートをすることに気持ちが行き過ぎて、自分の世界が狭くなり、そこにしかりアリティが感じられなくなってくる。普通の世界の濃度が低くなり、自分の居場所がなくなるように感じられてくる。

日本にいる中国朝鮮族のための運動会、送年会や新年会、さらには婚活イベントなどの実践活動をしたのは、関西に朝鮮族コミュニティがなかったのも、同じ民族として何かやらないといけないといった責任感があったからである。それに、コミュニティ研究の一環として実践が必要だったことなどもある。

2.3.2 これまでの生活のとりあえずの総括

家族は今では撫順を離れて、韓国にいる父と日本にいる私を除けばすべてが大連にいる。彼らとは、2000年の初めごろまでは国際電話で、しかし今では、QQ（コミュニケーションアプリ）やカカオトークを用いて、画像音声チャットで頻繁にコミュニケーションしている。

日本生活の中での、知り合いは普通の人と比べて随分多いほうだと思う。携帯の番号登録者数が277名、カカオトークが127名、facebookが203人で、多い順に言えば、朝鮮族、日本人、在日。そして、台湾人、韓国人が1人ずつ。その一方で、親しい漢族の中国人はいないし、そもそもほとんど接触がない。

そうした知人たちとは、学校、団体、研究（勉強）会、様々なイベント、調査に通っているキリスト教会、バイト先、友人の紹介などで知り合った。特に朝鮮族の人々とは、朝鮮族関連のイベントの準備過程や、会場で出会った。その他では、在日のNPOセンターに足しげく顔を出していることもあって、その関係で連鎖的に在日の人たちと知り合うチャンスが多い。

私は日本の企業組織に合わない性格である。アルバイトしている事務所でも息苦しく感じる。上下関係が厳しいことに加えて、朝鮮族や中国人、そして留学生に対する差別意識を感じることもあってのことである。日本人との付き合いもあり得意ではない。朝鮮族、韓国人とはそれほど壁を感じないが、日本人が相手だと、自分の感情を素直に出せない。

2.3.3 今後の生活設計など

将来に関して言えば、中国には戻れないと覚悟している。就職先がないし、占いをするにしても無理である。中国語に自信がないうえ、占いはクライアントの状況把握、意思疎通が非常に重要なのに、その知識や勘が、長年の日本生活の後では、働きにくい。だから、日本の在日集住地域で占いをするほかない。その場合、「学

位を持った占い師」といった形で自分の占いをブランド化してクライアントを獲得するのも一つの手立てかもしれない。しかし、大学院に通っているのは、そんな実利の為だけではなく、学問を修めて、いつかは、占いを科学的に説明する本を書きたいという気持ちもある。しかし、仕事にしても生活にしても、ビザの問題が将来不安の最大のものである。

結婚して夫を支えながら子育てしたい。母親としての人生に憧れがある。その一方で、研究を続けることができるなら、教育戦略に関する研究を本格的にやりた。さらには、占いカウンセラーになりたいとも思っている。東洋思想(占い)と西洋思想(心理と精神分析)を統合した新しいものを作っていきたい。それは一人の凡人女性が男性のお坊さんたちの知を乗り越える方法だし、実はそれこそが、師匠が私に対して抱いていた期待だったのではないかと思っ

ている。

日本に来てから6年間学んだ私立大学はキリスト教系で、聖書の授業でも熱心に勉強した。最近ではキリスト教会に通って参与観察を行っているが、信者たちがやっている行動を私もする。例えば、讃美歌を歌ったり、祈ったりしている。牧師さんの話には少し違和感はあるけれども、私は自分が仏教徒だからといって、キリスト教を排除するつもりはない。

神様は心にあると思う。神様が助けてくれるのではなく、神様の心で人を助けてあげるべきだと思う。そのために「仏心」が必要だと思う。拜むとき、他人がよくなることを神様に願うが、自分のことがよくなるようになど願ったりはしない。欲を抑えようと常に努力している。欲が人を辛くさせると思うからである。ともかく、お寺や教会といった宗教施設はコミュニティを作るのによい組織だと最近つくづく思うようになった。

3. 留学までの中国生活についての検討

前章のライフヒストリーを受けて、本章では、日本への留学のために中国を離れるまでのAさんの家庭、地域、習俗、文化などの環境世界、そして改革開放、とりわけ、韓中修好以来の中国の社会変動とAさんの個人的性向を含めた個人史がどのような関係にあったかを確認・検討する。

3.1 朝鮮族共同体の枠内の成育環境

まずは、留学以前には彼女の生活環境が基本的に中国朝鮮族の枠内にあったことが確認できる。証言中には漢族との関わりについての言及があるが、それは筆者が特に質問して引き出したことにすぎず、関係は深いものではなかったようである。ほぼ朝鮮族だけの生産隊の枠内での家族生活、友人関係、そして通った小中学校、師範学校、教員として赴任した朝鮮族学校など、そのすべてがほぼ朝鮮族だけの、そしてほぼ朝鮮語の世界であり、彼女の言語や思考は中国朝鮮族の言語・文化・習俗の枠内にあった。もし万一、本人が希望していたように大学に進学し、漢語優先の教育、漢族などとの交友を経験しておれば、或いは、大都市での多民族混住の社会生活を経験しておれば、彼女のその後の人生は異なった軌跡をたどったかもしれない。

但し、Aさんのそうした成育環境が特殊だというわけではない。中国朝鮮族社会や個々人も地域によって、或いは大都市か地方農村かなどにしたがって実に多様な類型があるが、Aさんの事例は、地方の朝鮮族集住地域で生まれ育った朝鮮族としては一般的な類型に属し、なんら目新しいものではないのである。しかし、彼女のその後の人生のバックボーンとして、是非とも確認しておくべき事柄である。

3.2 朝鮮族の習俗

そうした環境世界の結果として、Aさんを含めた彼女の家族は、中国朝鮮族が朝鮮半島から持ち込んだ文化、習俗を相当に内面化していた

ようである。そのうちの 하나가、コリア系巫俗である。中国では文化大革命以降、公式的には巫俗信仰は禁止されていたとされるが、地域によっては秘密裏に維持されていたことが、例えば、『宗教史』（中国朝鮮族文化史体系）では次のように、少々微妙な言い回しで言及されている。

「解放以後、巫俗信仰は迷信として扱われながらも辛うじて持ちこたえていた・・・巫堂の子孫たちのうちの一部は・・・病を治療したり・・・図們ではつい最近まで安氏という巫堂が生存していた。・・・1993年5月11日に龍井市民族博物館で朝鮮族巫堂老婆を説得して、「クッ」の試演を行った・・・1993年5月13日に龍井市郊外の龍南村ではまた別の形式のクッ、すなわち「国社堂クッ」と「家内クッ」の試演があった。その依頼者は金某という女性だった。夫が韓国への出稼ぎでお金を稼いでいたが、隣村在住の親戚で兄にあたる人が、何かにつけお金のことでやかましく困ってしまって、それを収めるためにクッをした・・・いまだに一部の老人たちの中にはその影響が残っている」（北京大学朝鮮文化研究所 2006：99-104）。

また最近刊行されたばかりの中国の朝鮮族農村の研究書でも、その種の民俗宗教がひそかに実践されていたという証言が紹介されている（林梅 2014：142）。しかも、その書では、朝鮮族村落の生き残り戦略において、死者儀礼その他の民族的習俗の伝統が巧みに活用されていたことが克明に記されている。厳しい環境におかれた地方の朝鮮族社会では、激変する政策に翻弄される中でも、その種の伝統に依拠する心性が生きのび、それを中核として村民の団結、生活防衛の工夫が積み重ねられていたと言うのである。

そのようにひそかに伝わり、時には村落の紐帯の中核ともなることもあったコリア系の民俗宗教を含む習俗が、朝鮮族一般はさておき、少

なくともAさんの家族、そして彼女自身には一定の影響を及ぼし、彼らはそれをある程度は内面化していたことが明らかなのである。

3.3 社会的上昇の手段としての教育熱

朝鮮族が朝鮮半島から持ち込んだ文化的伝統は、そうした習俗だけではない。そうした巫俗的伝統とは正反対と思われかねない近代教育への憧憬もまた、朝鮮半島から持ち込んだ風潮に他ならない。しかも、制度的・政策的に弱者の位置を強いられた少数民族の農村社会という底辺から社会的上昇を果たすための最上の手段として、子女に対する教育熱はいっそう激しいものになった。（金美花 2007）しかも、Aさんの個人史にあつては、それは一般的風潮といった間接的なものにとどまらなかった。自らの生活史に基づく心性もあつてAさんの母は、姉の留学を勝手に決定し、率先して実行させた。そしてその姉の実例がその朝鮮族集落の日本留学熱に火をつけて、村落内に連鎖的に留学が生じ、Aさんもまたその波、とりわけ姉という近親のロールモデルだからこそより直接的に影響を受けて留学の道を選ぶに至る。

3.4 中国の社会変動と留学

韓中修好以来、中国朝鮮族の韓国への大量移動がもたらした問題についての言及は多様で、しかも数多くなされてきている。例えば、移動した人びとについてのみならず、残された人々の問題、例えば「留守児童」問題など（中国朝鮮族研究会 2006、召斗仙 2011）、他方では、韓国人の中国、とりわけ延辺地域への進出などによってもたらされた、韓国人と朝鮮族との軋轢、あげくは悲劇的事件などがメディアを賑わした。（呉泰成 2013など）

それらと比べれば、中国社会の改革開放以降の社会変動がAさんの家族に及ぼした影響は平凡で取るに足りないものと映りかねない。しかしともかく、そうした改革の一環としての土地承包制のおかげで、Aさんの父は会社の経営

者として一時は成功を治めたが、その後は逆に、韓国資本への貸与という生産大隊の決定によって、失職する羽目になる。それがなければ、彼女は師範学校卒業後には当初の約束通り父親の事業に参加して、後には事業家の道を歩んでいた可能性が高く、それは後に述べるような彼女の「安定してはいるが閉塞した日常生活からの脱出志向」に、ある程度は叶ったものであっただろう。ところが、父は生産隊によって企業経営のハシゴを外され、Aさんもまたそのせいで社会的上昇のハシゴを外され、彼女独自の道を見つけ出すことを余儀なくされた。

3.5 パーソナリティー：Aさんの留学その他のその後の生き方には、以上のような環境や社会変化の影響があったことは疑いを容れない。しかし、それをもっぱら他律的な要因というにとどまることなく内面化され、それが彼女の元来の個人的性向と相まって、彼女の留学、さらにはその後の生き方に大きく作用した。そうした元来の個人的資質、性向と思えそうなことは何よりも、先に少し触れた「安定した生活に飽き足らない何か」だったようである。それが「古い」といった心的、霊的な何かへの関心と、「外の世界への関心」もしくは向学心といったように、まるで正反対のように見える形で現れていた。師範学校を出て教員として働く安定した道に対する殆ど拒否反応とも言える証言、北京での英語学校通い、教員をしながら延辺大学の夏季講座に通ったということもその表れであろう。父の仕事を手伝うという形での経営参画の路が閉ざされた彼女は、「大いに遊ぶ」という形で彷徨しながらも脱出口を求める。そんな彼女に、姉の留学の実例、そして偶然に見かけた障害者の姿が脱出口を与える。既に父から約束を反故にされていた彼女はもはや、家族の反対をものともせず、当時は日本にいた姉とその恋人という強い味方を得て、留学を敢行する。

4. 留学以降

次いでは、Aさんの日本留学以後の生活、勉強、社会活動、そしてコリア系民俗宗教との遭遇などについて確認・検討する。

4.1 苦学生活

まずはAさんの留学生活の性格である。ある時期までの中国からの留学生の大多数がそうであったように、彼女の留学生活は同時に労働生活でもあった。そもそも中国の経済水準からすれば巨額の借金による留学であり、それを返済し、学費をねん出し、そしてさらに生計を立てねばならないのだから、留学生として法的に許容される範囲を大きく超えるほどに、労働に明け暮れながらの留学生活だったに違いない。その結果、彼女は心身の甚だしい不調に苦しみようになり、元来の占いなど民俗宗教的なものへの親近感も相まって、コリア系民俗宗教との遭遇に至る。

4.2 勉学における高い到達目標

次いで着目すべきは、彼女の並々ならぬ向学心、そして社会運動への関心と実践である。先ずは、向学心なのだが、彼女の学校履歴を見ると、何よりも生活や勉強のツールというレベルを越えた日本語習得の高い目標が窺われる。それによって日本語を専門職にするという実際の側面もあったのかもしれないが、「ほどほどで満足」といったおごなりさがないのである。結果としてその目標が達成されたのかどうかは定かではないが、そうした目線の高さが彼女の留学生活を必要以上に厳しくしたに違いない。そうした志の高さは、現実感覚の弱さ、或いは現実よりも理想を優先して自らを苦境に陥らせる欠点といった見方もできないわけではないのだが、ともかく、そうした性向は中国時代にも窺えたことで、それが異郷での留学生活においてさらに募ったように思われる。

4.3 コリア系民俗宗教との出会い

そして、本論の主要な関心事であるコリア系

民俗宗教との出会いと霊的資質の目覚め、そして訓練である。彼女のコリア系民俗宗教との出会いは、彼女の心身の病に由来している。巫病を契機に巫俗職能者になるといった巫俗職能者の通例とは必ずしも同じとは言えないが、少なからず類似した部分がある。彼女は病を契機として、藁にもすがる思いで、多額の支出を厭わず「師匠」の指示に従ううちに、その訓練を受けるようになるなど、自らの「使命」へ一歩踏み出す。彼女自身は自らの実践をいわゆるコリア系巫俗とは一線を画しているのだが、彼女の導きの師は、まさしくコリア系民俗宗教家に他ならず、その教えのもとに自分の資質を自覚し、その訓練、そして実践に至る彼女の事例を、コリア系民俗宗教の一事例としてとりあげる所以でもある。

4.4 社会運動への関心と実践

次いで注目すべきは、社会運動への並々ならぬ関心ばかりか実践である。「私」の安定よりも、それを越えた仲間への関心、とりわけ彼女と同じ苦境にあるエスニックマイノリティ達のコミュニティ形成の努力を怠らない。それはおそらくは、中国でのエスニックマイノリティとしての自己認識が、日本での留学生活の過程でさらに深化し、中国でも日本でも、そしておそらくはどこに行ってもマイノリティであるという自己認識に至ったからなのであろう。だからこそ朝鮮族のみならず在日というエスニックマイノリティに対する関心が募ることになった。

しかも、Aさんは先に述べた民俗宗教の訓練の過程で、これまでの自己を捨てて、占い師として他者が見えるようになるための訓練を自らに課していた。そしてその一環として、自分を取りまく他者たちへの関心が増したという要素もあった。

ともかく、以上の二つの要素が相まって、先ずはそれら個々（彼女がその一員に他ならない朝鮮族と、彼女が日本に来て見出した彼女の同

伴者である在日）のコミュニティ形成を、そしてそれら相互をつなぐと同時に、その両者を韓国につなぐという志向性を持った実践活動に邁進する。大学院での研究対象も、そうした実践への志向性と不可分に思われる。

5. 自立と今後の展望

本章ではAさんの現時点における、状況認識及び自己認識、そして今後の人生設計などについて、確認・検討する。

5.1 民俗宗教的職能者としての自立

師匠に出会い、訓練を経るうちに、彼女は「その種属」としての自覚を深める。過去を振り返り、両親の資質、経験、さらには、自らに内蔵されていた霊的な芽生えを自覚し、それらを受け入れようとする。そして、そうしたいわば人生の再解釈によって、自らの今後の方向性の道筋を付けようとする。実は、本稿で紹介した彼女のライフヒストリーもその所産に他ならない。つまり、自らの「使命」を自覚した時点から顧みられ、再構成された物語なのである。

ところで、彼女がクライアントとしては師匠が言うままに、巫俗的祭儀を含めてすべてを受け入れながらも、職能者としては、巫俗的なものを拒否して、あくまで四柱推命による占いを中心として、クライアントに対する精神的なサポートに自らの役割を限定していることをどのように考えればいいのだろうか。それはおそらく、コリア系民俗宗教のイニシエーション役であった師匠の実践に何らかの疑惑、例えば、不純な「金銭欲」のようなものを見出して、それに対する距離感、ひいては嫌悪感、さらには、コリア系民俗宗教の悪しき側面と自らの「使命」との乖離を垣間見たせいなのだろう。さらには、師匠の男性的、或いは家父長的権力に対する女性としての、そして弟子としての秘かな抵抗といった側面もあるのだろう。しかし、それだけではなさそうなのである。

5.2 併存もしくは対立する複数の志向性の統合 へむけての模索

彼女のコリア系民俗宗教者としての自立には、彼女が備えているもう一つの志向性が大きく作用しているように思われる。社会運動への関心と実践、そして研究対象としての現代思想などである。それはそもそもが、占い師として自己を捨てて他者を見る訓練の一環であったにしても、そうした現代的、かつ合理的な知的環境に身を置くことによって、彼女の民俗宗教的志向性に一定の歯止めをかけたのではなかろうか。後者を棄てるには至らなくても、その内部に線引きを行うことで、何らかの合理性を担保して、調整・統合を図る。その結果、師匠からの自立の準備は整う。こうして、巫俗的实践とは距離を置き、四柱推命による占いその他の精神的サポートに自らの役割を限定することにしたのだろう。

5.3 日本での経験を踏まえた人生設計と隘路

Aさんは日本での生活経験、そこで培われてきた交友、社会活動、社会思想研究、そして自らのコリア系民俗宗教者としての使命の自覚を基礎に、今後の人生設計を語る。様々な理由で中国への帰国を断念し、日本の在日集住地域で、民俗宗教者として生きていく方向に重心を傾けている。しかし、それには大きな問題が立ちはだかっている。ビザの問題である。それは彼女の今後の人生設計にとって死活の問題であるのだが、それに関しては、Aさん自身はいまだ、明確な解決法を持っていないようである。

もちろん、解決策が皆無というわけではない。例えば、彼女の私生活上の願望でもある結婚（ビザ取得を可能にするような相手との）、大学院を終えてからの研究者（ビザ取得を可能にする定職としての地位の確保）、それらは彼女の志向性と背反するわけではないのだから、理想的なのだが現状では決して容易なものではない。それ以外の方途としては、ある程度の規模の会

社（ビザ取得を可能にするような会社）に就職することであろうが、そうすると、彼女の志向性としての民俗宗教の職能者、そして社会活動や研究は甚だ困難になる。

その他で、彼女の「使命」である民俗宗教の職能者としてビザを獲得する可能性は、日本か韓国の仏教その他の宗教法人での修行を経て聖職者として認められて、それを盾に日本の法務局から「聖職者としての滞在許可」を獲得することであろう。日本での民俗宗教の職能者で日本籍を持っていない人は、そうした「外皮としての仏教、内部は民俗宗教」といった形をとって、法的、社会的認知を獲得してきた例が多々あるが、仏教信者を自任しながらもAさんにはそうした意志はなさそうである。（飯田2002：120-121）。また、ある調査（金良淑2007）によれば、韓国の巫俗職能者たちが組織を作り、時の権威主義的政治体制に対する支持と引き換えに法的社会的認知と保護を求めるような活動をしていきたいのだが、日本は民俗宗教が厳しく弾圧されるほどの権威主義的政治体制にはないし、時には必要にかられて相互に協力し合ったりすることもあるが、基本的にはばらばらに活動しているコリア系民俗宗教者たちに、その気配はないばかりか、それが可能とは思えない。また、Aさんにその種の可能性を模索する意志など全くないのである。そもそもAさんは、一般のコリア系民俗宗教者と自らが同じ範疇に属していると考えていそうにもない。

したがって、先は見えない状態なのである。人生設計と言っても、棚の上の牡丹餅の域を出ず、まだまだ彷徨もしくは模索は続きそうなのだが、それより焦眉の問題は、学位をとるための論文を完成することである。いずれ、学位を取ることに成功した時点で、何らかの結論を出さざるを得ないだろう。或いは、学位を取れない場合でも同じことで、学生の身分を失い、当然のごとく、ビザ取得の問題が眼前に立ちだ

かることになるのは必至なのである。そしてその時になれば、Aさんはいまだ頭の中のものに留まっている人生設計をより現実的なものに加工して対処していくであろうが、少なからぬ困難がつきまとうに違いない。

それは傍からは少々特異に映りかねない「使命」を自覚し、それを担うことを決意したからこその試練、そしてそれと表裏一体の可能性に他ならない。そしてその試練は、コリアンディアスポラを生きる人々が各人各様に抱える試練と可能性に連なるものであろう。Aさんの今後の軌跡、そしてその困難の果てに得られる成果は、日本におけるコリア系民俗宗教に、またコリアンディアスポラに関心を持つ少なからぬ人々に貴重な素材と刺激をもたらすものになるに違いない。期待して見守りたいと思う。

6. まとめにかえて一本稿の意義と限界

以上、一人の中国朝鮮族留学生の半生をたどりながら、彼女の民俗宗教者としての自覚の深まりとその使命の現実化への模索に至る過程を、中国朝鮮族の生活環境、伝統的習俗、中国の社会変動、個人的資質、さらには留学してからの日本生活における研究、人間関係、そしてコリア系民俗宗教との遭遇、そして職能者としての自立の模索等を中心にして検討してきた。

しかし、既に断片的に触れてきたことだが、本稿は数多くの欠落を抱えている。そもそも証言の性格というものがある。Aさんはもちろん、真摯に自らの人生の過程を語ってくださった。しかし、彼女が言えないこと、言いたくないこと、言いたくてもうまく表現できないこと、さらには、彼女が忘れたこと、気づかなかったこと、知らなかったことなど、さらには、筆者が彼女から知らされながらもプライバシーなども勘案して書くわけにはいかなかったことも数多くある。したがって、紹介したライフストーリー自体がさきわめて限定的な価値しかなく、そ

れを基盤にした本稿が根本的な欠陥を抱えていることは改めて言うまでのこともない。そうした欠陥を補完するためには、彼女の証言をもっと具体的な時代の状況と照合して検証する作業、とりわけ彼女が成育した中国の時代状況や中国から日本への留学事情との関連で、彼女が保持するに至った生活資源（経済的資源、人間関係などの人的資源、知的資源など）、その結果としての制約された選択の幅などについての検討が必要だった。もしそれが十全になされていたら、限られた生活資源に基づく生活の過程で彼女が選び取るに至った生き方の様相が、要するに条件によって制約されながらもそれを主体的に活用する主体性が、より鮮明に浮かび上がっただろう。しかし、筆者の力不足もあってそれが叶わなかった。今後の課題としたい。

しかし、そうした欠陥を抱えながらも、本稿にはそれなりの意義もあるはずである。そこで本章では、本稿が備える意義と限界を二点に絞って述べることで、まとめにかえることにする。

6.1 日本におけるコリア系民俗宗教の変貌の一事例

先ずは、日本におけるコリア系民俗宗教の変貌、とりわけ職能者やクライアントの出自や教育的バックグラウンドや世代などの多様化の事例紹介としての意義である。「越境するシャーマニズム」についての言及は多々あるが、本稿のように、日本において活動する中国朝鮮族出身者のコリア系民俗宗教職能者の事例は、管見の限りでは皆無である。それはレアケースだし見えにくいからなのだろうが、「韓国人や朝鮮族で韓国に移住して後に、日本に巫俗関連の短期の出稼ぎを繰り返している人たち」といったAさんの証言にも仄めかされているように、まったくの例外的なケースではなさそうなのである。

しかも、筆者の個人的見聞でも、中国朝鮮族のコリア系民俗宗教者が中国朝鮮族という枠を

越えて活躍している気配を感じたことがある。諸般の事情で調査研究には至らなかったが、その事例を参考までに記しておく。

2012年8月に中国北京・望京のコリアンタウンの民宿に泊まった時のことである。広大な高層住宅群の中の13階建の高層アパートの8階の3LDKのマンションで、中国朝鮮族の中年夫婦が民宿を営んでいた。所有者から賃借りして、民宿を営み（食事も提供するし、長期の滞在者もいるので、下宿屋的な要素もある）生計を立てているとのことであった。3室の個室には客を泊め、主人の家族4名はそのLDKの隅に据えられた二段ベッドをカーテンで仕切って辛うじてプライバシーを守っているが、それ以外のLDK、バス・トイレなどは、すべてが客と主人家族4名の共用だった。朝鮮族研究調査を目的とした私たち一行が泊まった日には、韓国の男女の若者が宿泊していたのを無理して空けてくれた1部屋ともう1部屋を私たち（在日2名、日本人1名）が使用し、さらにもう一人の同行者（日本にいる中国朝鮮族研究者）は他にスペースがないので居間で寝た。残りの一番広い部屋には、中国延辺からやってきた中年夫婦が長期滞在しながら、北京在住の韓国人や中国朝鮮族相手に、占いその他のコリア系民俗宗教実践でお金を稼いでおり、一年に何度もそのようにしているとのことであった。

生憎なことにその夫婦に質問する機会は得られなかったが、私たちのほんの短い滞在中にも、その夫婦は顧客を迎えていかにもそれらしき儀式をする様子が、ドア越しに垣間見えた。また民宿の主人は、そうした客の行動について、異様だとか迷惑だといった素振りを見せなかった。彼の周囲にはそうしたことがありふれているといった口調だった。

朝鮮族と中国在住韓国人とがコリア系民俗宗教を介してつながっていることを示唆するそうした事例と本稿の事例を重ねてみると、日本、

韓国、そして中国といったように、コリアンが生きる東アジア全域で、類似した現象が生起している可能性が予見される。「越境するシャーマニズム」という言葉の含意を日本や韓国に限ることなく、少なくとも東アジア、さらには、コリアンディアスポラに関連する全世界に広げて調査研究してみる必要がありそうな気がする。本稿はたった1例の事例にすぎないという致命的な欠陥を孕みながらも、そうした研究の先鞭になりうるのではなからうか。

6.2 コリア系民俗宗教を介しての朝鮮民族の再結合の事例として。

上で述べたことの延長で、破門仏教僧でコリア系巫俗を生業にしている韓国人、その教えを受けてコリア系民俗宗教を実践する朝鮮族、そして一時はその二人の後援者だった在日二世の実業家であり篤信者（この人についてはプライバシーに抵触する恐れのために、証言からその詳細を削除した）といったように、東アジアに散らばったコリアンが、コリア系民俗宗教を縁として日本の在日集住地区で一点に交わったこと、そのことが示唆する、コリアンディアスポラのコリア系民俗宗教を媒介にした再接触、あげくは再結合を展望させるという意味で、本稿にはいまだ素描レベルに留まっているとはいえ、それなりの意義を有しているのではなからうか。

現在、東アジアのみならず全世界への朝鮮半島からの移住者たちが、政治、経済、その他において、ある種の利益共同体として活躍する姿が見られる。それはここ20年ほどにわたる韓国政府、そしてそれと連動した民間の積極的な世界の「韓人」包摂、活用戦略の成果であるが、そうしたことが起こりえたのは、グローバル化が進行する現代における実際的な利害得失に加えて、一定の文化的同質性、或いは、実際には文化的差異が大きくなっていてもそれをさておいて、同一民族という心理的一体化、情緒的一体化の衝動のようなものを活用した結果なのだ

ろう。

そうした官民一体の、さらには戦略的なものでなくても、民族共同体的な側面を個人や集団が、あたかも自然に活用する例は枚挙にいとまがない。韓国人や韓国系の会社が中国に進出すると、その進出地域に職を求めて朝鮮族も殺到し、やがて集住地が発生する。中国の大都市にはその例が多数ある。それと同じようなことが日本でも生じている。例えば、大阪の西成区という「未解放部落」の人々と在日が集住していた地域に、そして彼らが従事していたボルトナットや靴製造業が斜陽化してその人々がしだいにそこから離れると、法的に不安定な韓国からのニューカマーや中国朝鮮族の人々がそこに流入してとって代わる（川本綾 2012）。そうした人びとの動きに伴って信仰共同体の形成も進む（権2011：187 - 203）。

しかし、そうした「民族的再結合」にも、見えやすいものと見えにくいものがある。先にも述べた官民一体の組織体や、信仰の共同体の場合でも大宗教、例えば、キリスト教や仏教の場合は、自己露出（顕示）することがその集団を権威化し、さらに人々を糾合させることになる。

それに対して、先の西成その他の法的に不安定な弱者たちの蠢き、そしてコリア系民俗宗教を介した本稿の事例のような現象は、逆に隠れて進行する。例えば、後者の民俗宗教系の人々のつながりは、官民が率先して進められる利益共同体や大宗教の恒常性、組織性とは全く異なる論理、関係、例えば、次のように定式化されているものだからである。「それは合致集団でもなければ特殊集団でもない。それはギャザリングとでもよぶべきであって、人々の日常のつきあいや対人関係のネットワークから、各種の霊能者を媒介にして形成されてくるものである」（塩原 1985：vi - vii）したがって、それは一般の人々の目には入りにくく、「知る人ぞ

知る」あるいは噂のレベルでは知られてもその内実が知られない形で、営まれることになりがちである。

そうした事情を考え合わせると、本稿の事例はたとえレアケースであったとしても、その背後にはそれと連動する秘かな流れが形成されている可能性を想定させるのである。

ところで、これまで使用してきた「コリア系」といった修飾語は、この種の潮流が民族に収斂するということを含意しているわけではない。そもそも、日本でのコリア系民俗宗教の雑種性と個々の非恒久性がそのことを既に如実に証明している。そうした知見を基盤に考えるならば、当座は便宜的にコリア系民俗宗教と呼んでいる現象も、日本で同じように、中国さらには東アジアの域を越えたもっと広い地域において、現地の様々な習俗と融合するばかりか、社会的認知や合法性を獲得するために様々な外皮をまといながら、その地の公的な 이슈にはなりえない個々人の切実な苦悩を一時的ではあっても癒し、その願いを一時的であっても叶えてもらったという安んじやカタルシスを与える役割を果たしている、或いは、そうなっていく可能性がある。

それは、そもそもが祭司やクライアントの出自など問わない可変性、柔軟性を備えているものなのだから、多種多様な変貌を遂げていくうちに、コリア系といった形容が似つかわしくなっていくものになっていくかもしれない。

現時点ではほとんど目につかないレアケースに属することは重々承知のうえで、現在までに証言を取りえた一事例をもってして議論を展開してきた所以である。

今後はそうした事例をさらに収集し、個々の事例を本稿におけるよりももっと対象化、客観化して、こうした一般には目につきにくいコリア系民俗宗教の越境性と、それと関連するコリアンディアスポラの再接触、再結合について論

じるべく努めたい。

参考文献

- 中国朝鮮族研究会、2006、『朝鮮族のグローバルな移動と国際ネットワーク』、アジア経済文化研究所
- 飯田剛史、2002、『在日コリアンの宗教と祭り—民族と宗教の社会学』、世界思想社
- 玄善允、2011、「龍王宮再考—聖性を欠いた場における折りと孤立した共同性—」、『コリアンコミュニティ研究』vo2、こりあんコミュニティ研究会、35-47
- 2013、「在日済州人女性の巫俗実践とその伝承—「龍王宮」を中心に—」『女性学評論』第27号、神戸学院大学女性学インスティテュート、87-118
- 川本綾、2012、「西成の在日コリアンと産業」、『コリアンコミュニティ研究』第3号、こりあんコミュニティ研究会、28-31
- 김화선、2011、『조선족마을의 변천연구』, 연변대학출판사、(金花善『朝鮮族村の変遷に関する研究』、延辺大学出版社)
- 金美花、2007、『中国東北農村社会と朝鮮人の教育—吉林省延吉県楊林村の事例を中心として(1939-49年)』、お茶の水書房
- 金良淑、2005、「済州島出身在日一世女性による巫俗信仰の実践」、『韓国朝鮮の文化と社会』第4号、風響社、14-54
- 2007、「ナショナリズムを相対化する契機としての周縁：韓国と在外コリアン社会の民族誌的考察」中の3-1. 伝統的宗教職能者(巫者)の同業者団体、78-79
www.jfe-21st-cf.or.jp/jpn/hokoku_pdf_2007/asia08.pdf
- 2009、「韓国の出稼ぎ巫者とトランスナショナルな信仰空間の生成」、研究報告編集委員会編、『旅の文化研究所研究報告』18、旅の文化研究所、17-33
- 2014、『人の移動事典』吉原和男ほか、丸善、218-219、「在日コリアンの巫俗信仰—一世から四世へ」
- 権香淑、2011、『移動する朝鮮族—エスニックマイノリティの自己統治—』、彩流社、187-203
- 林梅、2014、『中国朝鮮族村落の社会学的研究—自治と権力の相克—』、お茶の水書房
- 呉泰成、2013、「中国同胞から「朝鮮族」へ——1970年半ばから1998年までに見られる朝鮮族の移住過程を中心に——」、朝鮮族研究学会誌3号、18-33、
- 北京大学朝鮮文化研究所、2006、中国朝鮮族民族文化史体系6『宗教史』、民族出版社
- 塩原勉、1985、「はじめに」、『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』i~ix、創元社
- 宗教社会学会編、1999『神々宿りし都市—世俗都市の宗教社会学』、創元社
- 2012『聖地再訪 生駒の神々』、創元社
- 宮下良子、2005、「越境するシャーマニズム」、『韓国朝鮮の文化と社会』、第4号、風響社、55-85
- 山口覚、2012、「往来する神々、越境する人々—宝塚市の朝鮮寺・宝教寺をめぐる—」、『たからづか』、第25号、宝塚市教育委員会、84-115

付記

1. 本稿は大阪経済法科大学アジア研究所2014年度研究補助金による成果の一部である。関係者の皆様にこの場を借りて、感謝の意を表しておきたい。
2. 長期間にわたって協力いただいたAさん、そして関連情報その他のアドバイスをくださった林梅さんに、心から感謝する。